

フランス高等教育制度の二元的構造に関する歴史的考察 —— 1903年の高等師範学校のパリ大学への併合を事例として ——

向 井 一 夫

Une Etude sur la Structure de Bifurcation de l'Enseignement Supérieur en France
- Rattachement de l'Ecole Normale Supérieure à l'Université de Paris de 1903 -

Kazuo MUKAI

I. はじめに—問題の所在

1903年11月30日、後年の研究者によって「挫折した謀殺」と称されることになる¹⁾内容をもったデクレが發布された。それは、「高等師範学校のパリ大学への併合に関するデクレ」²⁾であり、このデクレの發布により、それまで自治と特権を謳歌していた高等師範学校は、パリ大学内の一部局としての地位に甘んじることを余儀なくされることになる。

世紀転換期、高等師範学校は、毎年、厳しい選別を通過した約20名の文科生徒、約15名の理科生徒を入学させ³⁾、独自の教育によって、彼らを3年間で様々なアグレガシオンの取得、リセや学部教育職へと導いた。入学のための競争試験の要求、およびユルム街での習慣となった学際的な勉学は、ノルマリアン、とくに文科のノルマリアンを、専門家である教授職ばかりでなく、19世紀後半期以降、ジャーナリストに代表される幅広い教養人に形成した。学士院に入会する高等師範学校卒業生、さらにはパストゥールの威信の栄光に包まれ、その学校は、エコール・ポリテクニクとの競争において、中産階級出身の最も優秀なバカロレア有資格者をそこに引きつけた。また、1897年から1899年にかけて、ノルマリアンがとても重要な役割を果たすドレフュス事件は、共通の価値によって一致団結した知識人階層の存在をあらわにした⁴⁾。

しかしながら、ドレフュス事件の直後、この学校の歴史のなかで最も重大な転換が起こる。それは、公教育大臣ジョゼフ・ショミエに署名された1903年11月10日付のデクレの發布であり、高等師範学校をソルボンヌに併合し、ユルム街の教員団を廃止し、ノルマリアンを単なる学士号とアグレガシオンの奨学生（ブルシエ）とし、その入学者数を拡大するというものであった。この改革は、本来の役割を果たしていない教育機関の消滅の前兆であると考えられ、「高等師範学校は、ライヴァルであるソルボンヌによって破壊される」と考える者もいた。高等師範学校は、この不安な診断より長生きするが、1903年の改革は、公的には今日まで維持されており、20世紀のその学校の歴史全体を照射するものである⁵⁾。

この改革は、1899年から1909年にかけての急進的共和派の非常に特殊な状況、さらに中等教育の現代化の状況の下で理解する必要がある。実際、19世紀末から、初等教育と高等教育という共和派の実証主義にもとづく教育改革のなかで、中等教育は、1900年頃、革命前の伝統に委

ねられたままであり、その大部分はジェズイット修道会に起源をもつものであった。したがって、最も伝統的な古典教育の完成の場であり、リセ教授の養成所である高等師範学校は、改革派教育学者の大きな改革目標の一つとなり、中等教育改革の余波を直接に受けたことはさほど驚くべきことではない。高等師範学校のソルボンヌを前にしての屈服、それはしたがって現代派を前にしての古典派の屈服、科学を前にしての人文主義の、急進派を前にしての貴族主義的なりベラリスムの屈服と同義である⁶⁾。

フランスにおける教育学説の歴史を扱った社会学者デュルケームの『フランス教育思想史』⁷⁾は、同書のモーリス・アルヴァックスによる「序」にあるように、デュルケームが1904年から1905年に開講し、その後も行われた講義「フランスにおける教育学の変遷」をもとにした著書である。1902年の教育改革の際に各学部の中に教授資格志願者全員に対して理論的な教育実習の講義をおくことが決定したが、パリ大学ではその計画実施の責任がデュルケームに依託され、それがこの講義となって実現する⁸⁾。第三共和政下の教育改革、とくに中等教育と高等教育の革新において、デュルケームは改革派の立場に立ち、実際に高等教育改革ではその前線にあり、公教育省の高等教育局長を務めたルイ・リアールとは、ボルドー時代からの知友であった。その関連から、デュルケームがパリ大学で行ったこの講義は、当時の教育改革、とくに高等教育改革と大いに関係するものであった。本稿との関連でいえば、改革が実現し、学部の集合体である大学が復活した世紀転換期、パリ大学のとくに文学部、理学部と高等師範学校との関係が問題となり、高等師範学校の性格、位置づけが議論された。それはフランス特有の中等教育の内容ともかかわり、古典教育のメッカでもある高等師範学校の廃止が決定され、とくに中等教員の養成の場であるならば、本来的な教育学の教育を新たな高等師範学校の主要な任務とすることが検討されていた。その意味で、デュルケームの講義は、高等師範学校の廃棄のデクレの発布の翌年に行われたところにその大きな意味があると考えられる。彼は教育学の教育について同書の第1章「フランスの中等教育の歴史」のなかで「換言すれば、教師たちに対し彼等が担当する教育上おこる主要な問題、その解決のために提起される解決の仕方に通曉せしめ、それによって彼等が問題の本質を知って確固とした意見を抱くようになることが絶対に必要なのである。このような手ほどきは教育学の教育によってしか与えることは出来ないが、この教育が有効な効果をうむためには適切な時期、すなわち将来の教師が学生として大学の教室で勉強中に与えられるべきなのである。このようにして、未来の中学校の教師がその職務のため準備を行うことのできるわが学部において、この教育学の教育を組織化する必要があるという見解が生れたのである」⁹⁾と端的にその必要性について述べ、「一般的に教育学に対して一種の不信を抱いている、フランスに特有の古くからの偏見がある」¹⁰⁾として、これまでのフランスにおける教育学教育に対する無関心を指摘する¹¹⁾。

デュルケームの考え方は、まさに、当時の高等師範学校の位置づけ、とくにそこでの教員養成機能の問題と深くかかわり、それをめぐっての一方の論者の意見を集約したものであったといえる。まさにそういった状況のなかでの「教育学の変遷」というタイトルであった¹²⁾。

本稿では、高等師範学校の存廃をめぐって、こうしたデュルケームのような改革派の意見と、それに異議を唱え、旧来の高等師範学校を維持しようとする勢力との錯綜を探るなかで、フランスに特有の高等教育制度の分岐した二元的性格の一端を明らかにする。

II. フランス高等教育構造の歴史的特殊性の起源

パリ大学を中心とするフランスの中世大学は、15世紀を境として凋落の一途を辿り、その知

的役割を大学とは別の教育・研究機関に譲ってしまうことになる。16世紀以降のフランスの大学は学問的輝きもほとんど喪失し、18世紀に至ってもこうした状況は変化せず、大学、学部の荒廃のなかでフランス革命を迎えることになる。フランス革命は、中世以来の遺物であり、ギルド精神（同業組合精神）を体得する団体としての大学を廃棄する対象とした。1793年3月、大学付設のコレージュの財産が国有財産として国家に没収され、大学はあくまでも法令上（de droit）存続していたにすぎず、事実上は（de facto）存在していないのも同然であった^{19）}。こうして、1793年9月、革命政府によって旧来の大学、学部は廃止されることになる。そして、これらは革命期を通じて、法学校、医学校などの専門学校という新たな高等教育機関にとって代わられる。また、軍事、技術に対する社会的需要から、専門的教育機関の設置が急速に進み、例えば、1794年にはエコール・ポリテクニク、高等師範学校が設立され、工兵学校、橋梁学校、鉱山学校らと並んで、のちに「グランゼコール」と称されることになる一連の専門学校群が創設される。

革命期の教育制度は、1808年のナポレオンの帝国大学制度の創設によって再編成される。帝国大学制度下において学部が復活する。ここでいう帝国大学とは、帝国内の全教員、全教育機関を統括する一種の教育行政機構であり、帝国大学下の各学区には6階梯の教育機関が所属することになったが、このうち「高等な学術と学位の授与を目的」とするのが学部であった。帝国大学の5種類の学部のうち、神学部、法学部、医学部が、聖職者、法曹、医師などの専門職業人の養成を目標としていたのに対して、新設された理学部、文学部はその趣を異にしていた。それら両学部は、リセに付設され、コレージュ・ド・フランス、エコール・ポリテクニク、リセなどの他の教育機関の教授である併任教員によって構成された。いわば、両学部はリセの「延長」として、また「補完物」としての性格をもつものであった。また、これら両学部に期待された機能は、リセ教員志願者のための学位授与機関、審査機関としての働きであった。このため、理学部、文学部では、実際の教育・研究機能を果たしているというよりは、単なる試験機関としての役割の方が重要であり、そこで提供される講義も、登録学生というよりも一般の人々のための公開講演としての性格が強かった。両学部のこうした傾向は、1870年代まで続くことになる。しかし、これらの学部制度と、先に述べた「グランゼコール」とは別系統の教育制度であり、両者は併存し、その管轄も多くが異なっていた。

19世紀は、科学・学問の専門職業化の時代であった。欧米各国は、科学の専門職業化、再生産機構の確立に努め、近代的高等教育制度の創設をめざした。しかし、フランスにおけるナポレオン以降の学部制度は、科学研究機能においても、教育機能という点においても他国に先んじられており、両機能におけるグランゼコールの優位は圧倒的であった。それらグランゼコールに対して学部制度の教育、研究機能の沈滞は明らかであった。こうした学部制度に対する不満と改革の声が、19世紀後半、とくに1860年代以降高まってくる。その改革の方向は、教育、研究機能の充実とともに、分裂した学部を連合して大学にするという革命以前の高等教育構造の再生であった。1896年、学部の集合体が大学を構成するという中世大学の構造が復活するが、高等教育は、「大学」セクターと「グランゼコール」セクターで担われるという構造に変化はなく、いわば高等教育制度の二元的構造は存続し続け、とくに後者のセクターはその実質的教育機能において、エリート養成の機関としての特質を強め、今日にまで至っている。

III. 高等師範学校とパリ大学との相克

19世紀を通じて、高等師範学校は長い間、唯一のリセ教授の養成センターであった。そこは、

実際に若者がリセをはじめとする中等教員の教授資格であるアグレガシオンの準備をフルタイムでできる唯一の場所であり、その競争相手はすでにポストに就いている講師あるいは復習教師であった。19世紀中葉の高等師範学校は、パリ大学の文学部と理学部（ソルボンヌ）の教育上、研究上での無能力とエコール・ポリテクニクの学問的沈滞のために、真の高等教育機関としての役割が高まり、アグレジェ、学識者そして研究者を生産し、文科の人々にとってだけでなく、理科の人々にとっても、1870年にはフランスの真の高等学術の機関となっていた。地方においてと同様パリでも、学部はあまりにも学位の授与（基本的にはバカロレア）に翻弄されており、予算も少なく、真の学生も在籍せず、設備も不十分であった。その知的到達度は限界があり、そのことは1870年以前に口頭審査を受けた博士論文の少なさが証明してくれよう¹⁴⁾。

しかし、普仏戦争後、学部制度、とくにソルボンヌを改革せんとする熱が高まり、ベルリン大学をはじめとするドイツ大学がモデルとなり、科学が体制の形而上学となる。1877年以降、文学部と理学部に対して学士号とアグレガシオンの奨学金の創設、新たな建物そしてとくに実験室の建設、講師と実験主任の採用などの優遇策が適用される。その恩恵を最も得たのは明らかにパリの両学部で、それらは1885年から1901年にかけて、ヌーヴェル・ソルボンヌという新たな建造物の下に設置され、それ以降ヌーヴェル・ソルボンヌはユルム街の高等師範学校と競争関係の中に入る。

1870年頃には、高等師範学校での教育は、ソルボンヌのそれよりも確実に多彩で、深奥なものであったが、1900年頃になると、事情は変化していた。実際、その学校はパリの二つの学部の講座の増大についていくことができなかつたし、同様に、一定の生徒が学部での講義に出席することを許可せざるを得なかつた。同時に、セミナー、学術雑誌、奨学金によって支えられたあらゆる学問的生活は、ソルボンヌの活動を根本的に変えた¹⁵⁾。

この状況の中で、高等師範学校の無益さというテーマについての新聞キャンペーンが展開する。それは、1892年5月25日のル・タン紙上におけるラヴィスの攻撃的なインタビューで開始する。その後も、フィガロ紙、19世紀紙、エヴェヌマン紙などで、激しい攻撃が発せられる。また、中等教育に関する1899年の議会アンケート（リボー・アンケート）のなかで、ラヴィスは、「高等師範学校は大学の文学部とだぶっている」と、繰り返し力説する。アミアンのリセの歴史教授フランソワ・タラマは、「高等師範学校は、それ自身では、もはや存在理由をもたない。というのは、あらゆるところからアグレガシオンに到達するから。高等師範学校は、帝国大学内において、往々にして窮屈な、閉鎖的特権階級しか作り出さない」と強く主張して、攻撃する¹⁶⁾。

しかし、19世紀末の高等師範学校とソルボンヌとの関係は、このように増大した競争関係だけでは説明できない。実際、ソルボンヌ教授の大半がユルム街出身であり（1879年から1908年にかけて、ソルボンヌの文学部に任命された教授の79%がそうである）、そのうえ、高等師範学校卒業生はヌーヴェル・ソルボンヌの重要な部分、とくに改革派のそれ—エルネスト・ラヴィス、フェルディナン・ブリュノ、エミール・デュルケームなどを輩出したことを想起すべきである。そのうえ、理科ノルマリアンは、ずっと以前から、高等師範学校のコンフェランスに並行して、ソルボンヌの講義に出席している¹⁷⁾。

それ以上に、ソルボンヌとの競争関係における後退とともに、高等師範学校の果たす機能の独自性の欠如、その曖昧さが問題とされる。まずそれは、中等教員の養成の場合、高等教員の養成の場合かという問題である。1880年代から1900年代にかけての高等師範学校は、一般教養の

必要と専門化された文化の必要性とのあいだ、つまり中等教育の完成か高等学術への入門かのあいだで、はっきり区別され得ない。それはその学校の長い間持続させた性格の一つとかかわっている。ユルム街は、多くの点で今日でもなお、一種のエリート大学としての優秀な中等学習の完成学校である。とりわけ、19世紀には、入学試験とノルマリヤンの学習計画は、一般教養が重要であった。

次に、高等師範学校は文科の教育機関なのか、理科なのかという問題があった。たしかに、高等師範学校の文科は、学生数も多く、古典的中等教育と最も密接に関係し、影響力のあるものであった。当時、大部分の教養人たちの考えでは、〈ノルマリヤン〉とは文科ノルマリヤンのことを示唆した¹⁹⁾。しかし、1890年代の高等師範学校理科に付された通念は変化し、注目するに値する。高等師範学校の理科部門は、エコール・ポリテクニクと類似した入学様式を採用していた。受験生は、特別数学学級を終えると、両校（高等師範とポリテクニク）の入学選抜試験を受験し、最も成績のよい者は一般に両校とも合格する。夏の間ずっと、ユルム街の方は、そのため、入学辞退の不安にはらはらしている。そのことは、二つの機関の相対的評価を示していた。第二帝政の中頃まで、ポリテクニクは、威信、科学的手段、現実的な将来の展望つまり就職口の点で、高等師範学校を圧倒していた。高等師範の初期の名簿は、X（エコール・ポリテクニクの略）のそれに較べて数が少ないにしても（200人に対して13人から20人の名前）、Xの合格による高等師範学校への入学辞退は、ノルマリヤンの入学者を確保するため、はるかに順位を下げることを強いられた。しかし、その社会的、経済的威信に比して、徐々に高等師範学校の知的威信は高まって行き、高等師範は、Xに合格する受験生を自校に引きつけることに成功する。パストゥールの二重の役割—第二帝政期の科学的研究の指導者として、後に国民的神話として—は、その点で重要であろう。彼の貢献によって、1858年以降、最も優秀な理科生徒は、高等師範卒業後すぐに高等教育に参入する経路を所有することになる。具体的には、それは高等師範の同じ実験室で学位論文の準備をすることができるアグレジュ・プレパラトゥールというポストの彼らへの提示である（ソルボンヌ理学部の113名の教授のうち、大半がユルム街出身である。そしてこれらユルム街出身者の大半がその経歴をユルム街でのアグレジュ・プレパラトゥールで始めている）。そのうえ、彼の狂犬病ワクチン（1885年）の世界的評判は、それ以降、高等師範学校を単に教授たちの神学校としてだけではなく、とても偉大な学者の養成所としての地位を確実にした。こうした就職口の付与は、エコール・ポリテクニク入学のための高等師範学校入学辞退が1870年から1890年まで減少する傾向になり、そして、名高いダルブーの事例が、両校を真のライバルとさせた（ガストン・ダルブーは、同時にXと高等師範の首席合格者となり、高等師範への入学を選んだ最初の受験生（1861年）。19世紀末、ほとんどすべての理科コンクールの高等師範首席合格者はユルム街を選択する。1875年から1903年にかけて、ユルム街の首席合格者29人のうち5人だけがポリテクニクに入学した）。両校とも首席で合格する受験生が、ユルム街を選ぶのはもはやまったく例外ではなくなった¹⁹⁾。

1901年の時点で大学のポストにある教授については、理科ノルマリヤンは歴史上最大に近い登録がなされる。しかしながら、以下の二つの要因が、職業の上で、この学校を通過することの影響力の限界を明らかにする。まず、1890年以降、講座の創設と専門化の運動が、ノルマリヤンによってそれほど専攻されていなかった、あるいは彼らが中等教育のアグレガシオンの厳格な区分のためになおざりにする学問分野に寄与する。第二に、パリの準備学級あるいは地方のグラン・リセにおける職務の威信は、多くの数学、物理学のアグレジェであるノルマリヤンの目に、幽霊のような聴衆と話にならない施設を有する地方の小さな学部での講座の獲得の魅

力を見えなくさせていた²⁰⁾。

古典主義と現代化の葛藤は、高等師範の理科には影響を与えなかった。理科への入学試験の様式は、1885年以降、特別（専門）教育と現代教育のバカロレア取得者（ラテン語翻訳は必修ではなくなる）の受け入れを可能とする。そのうえ、高等師範の理学部との関係は、その文学部との関係よりも良好であった。文科生が試験の時にしかそこに姿を見せないにもかかわらず、理科生は毎日ソルボンヌのひとつないいくつかの講義に出席していた²¹⁾。

IV. 世紀転換期における高等師範学校改革をめぐる論争

世紀転換期は、激しい教育的論争と高等教育と同様に中等教育における大改革の時期である。1903年のショミエによる高等師範学校改革はこの文脈のもとで考えるべきである。1899年、議会の委員会はリセとコレージュの教育に関するアンケートを行った。その結果、古典と近代、ユマニストと科学者、高等師範学校の擁護者とソルボンヌの支持者をそれぞれ対立させる闘争の存在を明らかにした²²⁾。この状況の下で、1899年から1903年にかけて、高等師範学校はまさに古典派と改革派の議論の格好の対象となり、今後そう呼ぶのが適切かどうかという議論に飲み込まれる。

以上の論争は、高等師範学校の存廃をめぐる、その位置づけ、性格をめぐる大きく3種類に分類されよう。つまり、高等師範学校は進歩的な機関であるか、高等師範学校は民主的な機関であるか、高等師範学校は教育学的機関であるか、というものであった。

まず、高等師範学校が進歩的、リベラルであるとは、具体的には学問的に寛容であること、知的個人主義のことを指していると考えられる。保守的なものから革新的なものまですべてがそこに存在する。そのことの是非が問われた。

次に高等師範学校の民主性、とくにノルマリアンの社会的出自の開放性の問題である。「今日、我々は、民主主義の深遠な労働者と田舎の階層のなかから我が候補者を選ぶ。そこにはとても多くのエネルギーの宝庫が寄り集まり、発展するしかない勢力が芽を出している。我が愛しく偉大なパストゥールもその階層に帰する。我々は、労働者、農民の息子、とりわけ小学校教員の息子を受け入れ、市町村と国家の援助のおかげで、パリのリセで最後の学業を終えるために、コレージュ、次に県のリセで学業を終えた後で手に入れる」というペロー校長のリボー委員会での言葉は、そのことを裏付けようとするが、実際には、高等師範学校のリクルートは、基本的には中産階級のなかから、しかもそのころは中産階級の上層部分、教養ある部分のなかからなされていた。ノルマリアンは、教員の息子よりもずっとしばしば教授の息子であり、リセとコレージュの教授が数千人しかいない国で、それらの息子は1900年頃、ユルム街への入学者のおよそ3分の1を占め、それは314倍の過剰代表である。民衆階級出身のノルマリアン（農民と労働者の息子）は、実人員の6%でしかない。こうした社会的濾過の存在は基本的には、高等師範学校が、中等課程が社会的にとっても選抜度が高い時期に、その課程の最後に位置することによる。さらに、いくつかの大きなカーニュのクラス（1880年代のシャルルマーニュの沈滞の後とはとくにルイ・ル・グランとアンリ四世）のパリ集中は（1871年から1914年の文科生の65%はルイ・ル・グランあるいはアンリ四世でコンクールの準備をした）、総視学官が巡回して分配する奨学金にもかかわらず（しばしばそれは役人の息子にとって有効）、真のリクルートの民主化にとってかなり障害となった。社会的不平等はまた、強い地理的不均衡によって強められる。パリ生まれの生徒は、かなり明らかに、ノルマリアン人口のなかで過剰代表である（パリ生まれは、人口全体では8.5%であるのに、高等師範入学者の24.6%を占める）²³⁾。

最後に、高等師範は十分に教育学的な教育機関であるか、という問題である。高等師範学校がりセ教授のリクルートにおいて絶対的中心であることに翳りがさず時期に、その生徒に本来の意味での教育を十分に準備していないことへの非難が高まる。こうして、ユルム街での教育学講義の導入の必要性が、1899年のアンケート以降繰り返して主張される。議会の委員会の前で、ペローは、高等師範学校への理論的教育学の講義の制度化を冷淡に拒否する。ノルマリアンがその勉学の最後にリセで（ドイツ風の）実際の実践的な実習（研修）を行わないのは困ったものだと言いつつ一人の議員に対して、ペローは高等師範学校特有の「コンフェランス」の教育学的性格を強調し、さらに、「教育の2分の1、あるいは3分の2は生徒自身によってなされる。教員の前で、仲間の前で、しばしば他学年の仲間の前でなされるそれらの一つ、45分から1時間の一つのレッスン。高等師範学校のすべての教育は、したがって、応用教育学のそれであり、実践的教育学のようなものである」と誇張して終える²⁴⁾。

しかしこの1900年の教育学導入をめぐる論争は、二つの意味で興味深い。まず第一に、教育学導入を口実として、保守的で、個人主義的、耽美主義的であるとみられるリセの教授に、長い間ユルム街が体現してきた文学的で非歴史主義的、非政治的な伝統を退けた高度の進歩的で歴史主義的で市民的なイデオロギーを経験させることを目標としていることが明らかであった。第二に、ここで高等師範学校に付される教育目的は、さらにもう一度その深いあいまいさを目立たせる。高等師範学校は、その学校がずっと教育したいことのすべてを教育してきたが、どのように教育するかを教育することを望まない。高等師範学校は、いくつかの公的なもしくは非公式の目的の間で、ベンの仕事か、高等教育（そのためには教育学の必要性はほとんど重要ではない）および中等教育（まだ修辞学による以外では学べないと見なされる）かで迷っている。そしてとりわけ、高等師範学校は、エリートの教育には役に立たない、基本的には初歩の専門であるとして、教育学を軽蔑していた。大半のメートル・ド・コンフェランスは、1903年の2月から3月にはまだ、教育学の教育は高等師範学校では組織化できないことを一致して宣言していた。同時に、それでも、穏健派のある近代主義者たちは、高等師範学校の教育学の神学校（セミネール）への転換のなかに、ユルム街の古い館を正当化する—したがって救済する唯一の手段を見いだした²⁵⁾。

V. 高等師範学校のパリ大学への併合

1902年2月、3月、議会は、「高等師範学校はもはや高等学術の学校であるばかりでなく、真の教育学的機関であるように組織され、運営され」、その生徒は「アグレガシオンの候補生であるパリ大学の学生と一緒に共通の教育学的かつ専門職業的準備」を受けなければならないことを請願する決議に投票した。この基本的な考え方は、1903年11月10日の改革にまで継承される。したがって、寛容で教養ある人物であるジョゼフ・ショーミエ公教育大臣は、用心に用心を重ね、公教育高等評議会の意見を受け入れ、師範学校の教員にも耳を傾けるべくペロー校長を11月10日の前々日に省に招聘する。しかし彼が採択した決定は、それでもなおユルム街45番地をぼう然とさせた²⁶⁾。

ショーミエは、高等師範学校は、今後はパリ大学の教育学機関（研究所）となるべきであり、この大学に統合されることは不可避であるとする。11月10日付デクレの第1条では、「高等師範学校はパリ大学に併合される」とされる。したがって、高等師範学校はもはや学校独自の教員集団をもたない。第10条では「高等師範学校のメートル・ド・コンフェランスの終身雇用は廃止される」。そして以前の正教員はパリの学部の教員団に配属される。しかしながら、ソ

ルボンヌの教授、シャルジェ・ド・クール、メートル・ド・コンフェランスは高等師範学校の〈シャルジェ・ド・コンフェランス〉になり得るであろうことは予想される。そのコンフェランスが、もっぱら教育学的なコンフェランスか、それとも学問的なコンフェランスなのかはこの時点では規定されていない。高等師範学校のパリ大学への統合はまた、地方に他の高等師範学校が創設される事を予想させた。

ショーミエは、さらに、入学者を明白に増加させるための主張として、高いレベルの入学コンクールを問題視して、「高等師範学校への入学試験の実際のシステムを知っているものなら誰もが、毎年そこに入学する実力があるはずの若者を引き離さざるをえないし、最後の成績の入学者が入学生のかなで最もできのよい者であるとまもなくわかったり、最後の入学者と不合格者のトップの間の差はしばしば錯覚である、ことを知っている」と述べる。また、第6条では「毎年選任される生徒の数は、過去5年間のコンクールに合格したアグレジェの平均人数を下回らない」と規定され、規模の増大を予測させる。ノルマリヤンの数の増加は、その尊大な伝説を和らげることに繋がると理解された²⁷⁾。

ショーミエは、ついには寄宿制の義務を廃止し、第7条で「生徒は寄宿生かそれとも通学生である」と規定した。そのことは、ノルマリヤンがしばしばパリ出身であることの認識と追加的な建設費支出なしに入学者を増加させる巧妙なやり方であったことが予測できる。

高等師範学校の再組織化は、その入学選抜試験制度を改革する機会、つまり1902年の中等教育改革にリンクさせ（その結果、ギリシア語を選択しなくても古典バシュリエになることが出来る）、それを多様化する（たとえば文学のコンクールのオプションを創設する）機会を提供した。1904年5月11日、同じくショーミエの署名による新たなデクレは、その線に沿って入学試験方式を改革するものであった。それは、文科の入学試験におけるギリシア語の義務の廃止、ラテン語と国語のオプションB、ラテン語と科学のオプションCの創設、ラテン語作文をラテン語翻訳に置き換えること、また理科の入学試験での専門生徒に開かれる伝統的コンクール方式を修正するグループIと物理学、科学、自然諸科学の学生に開かれるグループIIという二つのグループの創設を定めた。高等師範学校の入学試験と学士号奨学金取得のための選抜試験を統合し、学士号奨学金を獲得した候補者は、中等教育の奨学金を受け取ることが出来ないことが定められる。これは、カーニュあるいはトウブに長居させないようにすること、その上、同じ趣旨で、三度以上コンクールに参加することを禁止することを意図するものであった。1905年12月22日の最後のデクレは、高等師範学校と学士号奨学金に合格した理科生に対して、一般数学の高等学術証明書取得を免除した²⁸⁾。

1904年から1914年にかけて、こうした新しい規定の適用が、厳密になされた。「1学年と2学年のどんな講義も高等師範学校では維持されない」「高等師範学校では、ソルボンヌのそれとは別の内容の一般講義しかなされ得ない」ことを求められた。1904年には、パリの副学区長リアルールは、プフィステルに〈カペー王朝〉に関する授業をユルム街ではなくソルボンヌで行うように強く求めたように、ボレルに対して高等師範学校での〈関数の理論〉に関する講義の開講を拒否した。高等師範学校の講義は、理科生にとっては、実験室でのいくつかの実験に限定され、すべての者にとっては、第3学年のアグレガシオンの準備と教育学の教育に限定された。1905年、デュルケームが有名な中等教育の歴史を行ったのはこの文脈においてである²⁹⁾。パリ大学での彼の教育学講義（フランスにおける教育学の変遷）は、1902年の中等教育改革（中等教育の現代化）法を強化するものとして公的に機能したが、それはリアルールのメッセージでもあった³⁰⁾。

改革後、高等師範学校への入学者は3分の2増加し、改革前の20名の文科、13名の理科から、1904年以降には文学生35名、理学生20名になった。不測の事態が1905年のコンクールで起こった。というのは、ほぼすべての学士号奨学金の要求が首都の学部からなされたからである。大部分のカーニュ生はパリジャンであり、入学試験不合格の時にはソルボンヌで勉学を続けることを望んだ。公教育省は、ノルマリアンは真のパリ大学の学士号奨学生であり、入学を許可されない一次試験合格者に配分される学士号奨学金は〈各県の学部〉に対して付与されることを強く主張した。地方の学部学生にも均等に奨学金が付与され、教育条件が改善され、ソルボンヌの輝きとはほど遠かった地方学部の活性化につながるものが求められた。いくつかの地方大学は、その最も攻撃的なのはリヨンの文法学者クレダであったが、高等師範学校はもはや存在しない、それはパリの奨学生の寄宿寮でしかない、ノルマリアンという名称はもう公的には使用されないし、それはすべての地方の学士号奨学生に与えられなければならない、ことを強く主張した。1903年以降、高等師範学校には、もはや独自の教授はいない、もはや生徒もいない、寮生だけである。システムの論理からすれば、高等師範学校は、もはやソルボンヌの物的付属物でしかなく、そこでノルマリアン—ノルマリアンだけを教えるのではなく、すべての学生が高等師範学校の部屋、実験室、図書館を利用するため、学部がその講義のいくつかを移す³¹⁾。しかしながら、高等師範学校の自律性は存続し、多く望まれる目的は達成されないのではないかとこの予測があったことは否めない。

VI. 高等師範学校のパリ大学への併合の限界—結語に代えて

高等師範学校は、1904年から消滅するはずであった。それは特有の証明書を決して交付することができず、もはや固有の教育を持たなかった。そしてその入学コンクールの合格はとても過小なメリットしか提供しなくなるはずであった。国会への予算報告は、その無条件の廃止を要求した。1910年から、高等師範学校理科とエコール・ポリテクニックとの競争関係は、再び後者の優位に働くようになった（1903年のコンクールでは、22名の理科ノルマリアンを入学させるためには、52位まで合格させなければならなかった）ことは十分予測できることであった。それでも、高等師範学校は生き延びた。存続を可能としたのはその入学選抜の制度であった³²⁾。

19世紀の末から、最も優秀な生徒を独占しているとしてソルボンヌが非難する準備学級の廃止の兆候が見られた。1895年には、高等師範学校のコンクールはやがて学士取得者に割り当てられ、最もよい準備はソルボンヌになるであろうという噂が流れる。カーニュの教授は反発したが、合格した候補者の大部分は、少なくとも文科では、すでに学士号資格保持者であるので、学士号の要求が入学要件を激変したことにはならないであろう、と見られた。カーニュの教授が決して譲りたくなかったこと、それは一般教養の要請であった。カーニュが1895年に救われたのは入試での一般教養の要求によってであり、1904年再び救われたのもそれによってである。ソルボンヌでの教育課程の専門化、学士プログラムの明確さ、そこで実践する課業の希少性は、一般教養のコンクールの準備において、ソルボンヌが、カーニュと張り合うことを許さなかった³³⁾。

高等師範学校のパリ大学への併合に関するデクレ発布の翌日集まった理科のメートル・ド・コンフェランスたちの一般的な見解は、「特別数学学級が存在する限り、エコール・ポリテクニックのそれと同じ環境で、高等師範学校の最も可能性ある生徒をリクルートし続けなければならない」というものであった。こうして、エコール・ポリテクニックが高等師範学校の理科部門

を救い、それとともに、文科部門をも救った。結局、実際の入学試験の方式はほとんど少しも変更を加えられなかった³⁴⁾。

多くの議論の結果にかかわらず、多くの側面で、1903年の改革は「恐れられた以上に、あるいは期待された以上に、高等師範学校を変えなかった」³⁵⁾。

実質的なソルボンヌと高等師範学校との関係は変化せず、「大学」と「グランゼコール」との高等教育の二元的構造の残存は、同じ公教育省の管轄下の教育機関であっても、その一元化は困難であり、況や、「大学」と「グランゼコール」との分岐の発展的解消はより困難であることを物語っている。両者の頑迷さ、二元的構造の硬直化を物語る一つの希有な事例であるといえよう。

注

- 1) Pierre Albertini, *La Réforme de 1903: un assassinat manqué?* Jean-François Sirinelli (sous la direction de), *Ecole Normale Supérieure, Le Livre du Bicentenaire*, 1994, pp. 31-72.
- 2) そのデクレについては, *La Réorganisation de l'Ecole Normale, Revue Internationale de l'Enseignement*, tome 46, 1903. を参照した。
- 3) 1902年, 214名の文科生徒が21の座席を求めて競い, 263名の理科生徒は13の席を競った (Albertini, op. cit., p.31)。なお, 高等師範学校への入学者数は, 1890年46名, 1900年37名, 1910年65名, 1920年55名, 1930年53名, 1940年52名, 1950年60名, 1960年82名, 1967年91名と推移する (Ezra N. Suleiman, *Elites in French Society*, 1978, p.71, table 3. 8.)。
- 4) Albertini, op. cit., pp.31-32.
- 5) Ibid., p.32.
- 6) Ibid., pp.31-32.
- 7) Emile Durkheim, *L'Evolution Pédagogique en France*, 1938 (デュルケーム著, 小関藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社, 1981年)。
- 8) Ibid., p.1 (『フランス教育思想史』7頁)。
- 9) Ibid., p.10 (『フランス教育思想史』23頁)。
- 10) Ibid., p.10 (『フランス教育思想史』23頁)。
- 11) ただし学生たちはデュルケームのそうした講義を時間の浪費として感じていたという見方もある (Robert J. Smith, *The Ecole Normale Supérieure and the Third Republic*, 1982, p.164; note 65)。
- 12) こうした高等師範学校をめぐる問題は, 中等教育問題とも無縁ではなく, 同じくデュルケームは「ところが, わが国の特殊性によって, わが国の歴史の大部分を通じて, 中等教育はわが国の学校生活の全部を占めていたことが明かである。高等教育は中等教育を誕生せしめたのち, まもなく全く完全に滅びてしまい, 一八七〇年の戦争の終了後, ようやく復活したにすぎない。初等教育はわが国ではその出現はきわめておそく, それが発展したのはわずかに大革命後のことである。それゆえ, わが国民の大部分の期間に亘って, 教育の舞台を全部しめていたのは中等教育なのである。それ故, まずわれわれが中等教育の歴史を書こうとすれば, 同時にフランスの教育, および教育学の全史を書かないわけには行かないのである」と述べている (Durkheim, op. cit., p.25 (『フランス教育思想史』48頁))。

- 13) デイルセー著, 池端次郎訳『大学史』(下), 東洋館出版社, 1988年, 209頁。
- 14) Albertini, op.cit., pp33-34.
- 15) Ibid., p.34.
- 16) Ibid., pp.36-37.
- 17) Ibid., p.37.
- 18) Ibid., p,44
- 19) Ibid., p.45.
- 20) Christophe Charle, *La République des Universitaires*, 1994, p.148.
- 21) Albertini, op. cit., pp.45-46.
- 22) Ibid., p.46.
- 23) Ibid., pp.50-51.
- 24) Ibid., pp.55-56.
- 25) Ibid., pp.56-57
- 26) Ibid., pp.57-58.
- 27) Ibid., p.58.
- 28) Ibid., p.59.
- 29) Ibid., pp.59-60.
- 30) Louis M. Greenberg, Architects of the New Sorbonne: Liard's Purpose and Durkheim's Role, *History of Education Quarterly*, vol.21, no.1, Spring 1981, p.86.
- 31) Albertini, op. cit., pp.60-61.
- 32) Ibid., p.65.
- 33) Ibid., pp.65-66.
- 34) Ibid., pp.66-67.
- 35) Smith, *The Ecole Normale Supérieure and the Third Republic*, p.73.